

## 第20回 A地区仮設住宅訪問記録 平成24年1月10日(火)

訪問者：松下、N研究員、T相談員、福祉総合学部学生2名(記録:LLPまち・コミ友田)



大震災から10ヶ月、新しい年を迎えたA地区仮設住宅への訪問である。松下と森の所属する大学は創立20周年を迎える。この創立記念事業「空飛ぶクジラ 絵本コンテスト」のため、今回も森は参加できない。また、学生も成人式で地方の実家に帰省し戻ってきていない等で参加がなかったが、今回初めて図書館のN研究員が同行した。

今回の持ち込んだメニューは、新年にふさわしく「縁起だるま」のペーパークラフトと音楽に合わせた健康体操のふたつである。

集会所に着くと、若い女性がすでに部屋を暖めてくれていた。T相談員である。昨年8月から国の施策として配置された生活支援アドバイザーとの連携もパイプが太くなり、A市児童相談所のT相談員の参加についても事前に連絡をもらっていた。暖められた集会室の中央には大きな長方形のコタツが置かれ、I地区仮設集会所と同じようにサロンの雰囲気が漂っている。車から材料やキーボードを降ろすと、松下とN研究員は早速、戸別に案内に廻ることにした。

前回、股引姿で散歩していたIさん宅に声をかけると、「ありがとう、でも寒いから行かねえ」と答える。その隣の常連参加のIさんは、すでに新居に移って姿がみえない。正月を期に引っ越したらしい。2軒先のSさんは、いつもIさんと一緒に参加してくれていた。声をかけると、「隣りに娘家族が越してきたのよ。手伝わなくちゃならないので今日は行けないわ」という。「お茶飲みだけでもどうぞ」と声かけして、足を進める。廻ってみると、空き屋が多くなっていることに気づく。全体の1割以上あるかもしれない。

これまでの訪問で会ったことのない、幼い女の子2人を連れた若いママにも声かけする。完成した作品を見せて誘うと、女の子たちは「行こう、行こう」とはしゃいでいる。

手順よくできるように森が準備した材料をこたつの上に準備していると、K君(Tさんの孫)

が走り込んできた。学校から帰ると、いつも集会所を訪れているようだ。「K 君、おばあちゃんに『待ってるから』と伝えてきて」というと、「うん」と走って行った。まもなく K 君はお婆ちゃん(T さん)を連れてやってきた。やはり、孫の力は大きいものだ。

T 相談員を含め、T さん、K 君、N 研究員の4人で始めることにした。まず、赤い画用紙からだるまの形を切り抜き、顔用の黄色い紙に見本を見ながら目や鼻を描く。K 君は鼻歌交じりで独創的な目鼻を入れている。同じ見本を見て描いているにもかかわらず、一人ひとりの顔立ちが違うのが不思議で面白い。「H さん、どうしたかしら。間違えて朝から待っていたのに来ないねえ」と、T さんが言う。N 研究員が製作の手を止めて、もう一度誘いに行く。しばらくして戻ってきた N 研究員の話では、移動販売の魚屋さんのトラックの周りにいたお年寄り三人に「だるまさんを作っています。歌も一緒に歌いましょう」と声かけしたところ、「カラオケなんか、できねえもの」と言っていたそうだ。

さて、作品づくりの方は、顔用の紙を赤い台紙に貼り、次にその下に漢字一文字をミニミニ色紙ふうにも貼ってもらうのである。I 地区の「一文字扇」のときと同様、この一文字にみな頭を悩ませる。悩まずに筆を走らせるのは K 君のみである。H さんのことがやはり気になっているらしく、「待っていたのにおかしいねえ」と、また T さんが言う。

その後の手順を説明したあと、今度は松下が行ってみることにした。棟の4列目に行くと、戸口の前に E さんが立っている。E さんはこれまで参加したことはないものの、松下と森の顔はいつもポストに入るチラシを見て知っているので、「H さんなら、次の通りの〇〇さんの所にいるよ。朝から、待ってたよ」と教えてくれる。「E さんも一緒に行きましょう」というと、「細かいことはできないから・・・」という。「作品づくりは手伝いますし、お茶のみだけでもどうぞ」というと、それならと一緒に歩き始める。そこへ、生イカのたくさん入ったレジ袋をぶら下げた H さんがやってくる。知り合いの所から自宅に戻る所らしい。

「イカを冷蔵庫に入れたら、来てください」と告げ、集会所に戻ると、K 君はすでに2つ目にとりかかっていた。遅れて参加した E さんも、しばらくしてやってきた H さんも手助けを受けて、それぞれのだるまを完成させた。並べてみると、悩んでいた一文字は、春・謝・志・起・立・辰などと添えられて、どれも表情豊かな「縁起だるま」となっていた。

N 研究員手づくりの大学芋と沢庵、松下の故郷信州の野沢菜、羊羹などで一服することにした。温かいお茶や甘いものが口に入ると、おしゃべりが滑らかになるものである。

今回初めて参加した E さんも、「家にばかりいるよりこうしてここに来るといいねえ。1週間に1回くらい来ようかね」と居心地の良さを実感したようだ。T さんと E さんが、手編みの襟巻を首に巻いている。「暖かそうですね。ご自分で編まれたのですか」と松下がたずねると、「もらったのよ。ね」と E さんが T さんに同意を求める。「いろいろもらったわ。食器とかもね、いろいろ」という T さんに、E さんが言う。「私は最初からじゃないから、そんなにもらってないわ。被災後、息子の嫁さんの実家に世話になったんだけど、いろいろあってね。9月から、ここに来

たのよ。今は気楽でいいわ」と語り始める。

前述のSさんの娘さん家族も年末に越して来たという。被災後10ヶ月を経て、仮設住宅を退去する人、入居してくる人、事情は様々である。そうした被災者の個別の課題が自助努力や施策によって解決され、安住を得られるのはいつのことになるのだろうか。

ふと気がつくと、K君はいつの間にかいなくなっていた。

ホッと一息ついた後、N 研究員のキーボードの伴奏で「ふるさと」「青い山脈」「夕焼け小焼け」などを一緒に歌った。カラオケなんかできないと言っていたEさんも、良く声が出ている。2回ぐらいみんなで歌った後、松下の振りに合わせて軽い健康体操を行ったが、伴奏に合わせて気持ちよさそうに身体を動かしている。すると、Eさんが「この音楽、夕方、防災無線で流れているよね、確か。今度それに合わせて、やろうかね」という。「そうだね、この曲だったらやろうかね」とTさんもHさんも言う。

何となく雰囲気は作者に似た「縁起だるま」を大事そうに持ち、少しずつ小分けした沢庵と野沢菜を夕飯用にと、それぞれが持ち帰っていった。

16時過ぎ、後片付けを終え鍵を中核地域生活支援センターの事務所に返却した後、次回のチラシ配りにI地区仮設住宅に向かった。あつという間に夕暮れである。I地区集会所前に車を止めると、防災無線から「ふるさと」の音楽が流れて来た。Eさんが言っていたのはこれだと分かった。I地区仮設住宅は、津波被害の大きかった海岸に近いので、吹く風が冷たい。松下とN 研究員は、1戸ずつ郵便受けにチラシを入れて廻る。A地区ほどではないが、やはり、空きになっているところもある。半分配ったころ、一軒の家から女性が2人出て来た。そのうちの一人が、「ごくろうさま。こんどいつ？ 私んとも入れてくれた？」と声をかけてくれる。期待される(待たれる)ことは、誰にとってもうれしく、モチベーションが上がるものだ。このやりとりこそが戸別配布の効果であると、松下は感じている。寒風の中でも、その後の足取りが軽くなったのは言うまでもない。

ネット裏の高齢単身者エリアで、まず声をかけたのは大学祭に来てくれた90歳のKさん。年末のI地区活動日に、自分で育てた八つ頭・大根・ネギなどを箱に詰め、正月用にと届けてもらった野菜のお礼を言うためである。「誰かと思ったよ」と赤い顔でコタツから出て来たKさんにお礼を言うと「そうか、よかった」「これ着てくれ、ばあさんのだ。もう誰も着ねえ」と毛糸のチョッキを2枚差しだす。松下は受け取った。松下が自分で着るわけもなく、誰か着てくれる人の心当たりがあるわけではないが、Kさんが津波で流されなかった妻の遺品を、Kさん自身で処分することができずにいると心中を察しているからだ。

一緒に住もうという息子の申し出を断り、大事な妻の遺品を仮設住宅に運び込んだのであろう。松下には今度これをやろう、少し若い森にはこれをやろう、そして〇〇さんにはこれをやろうというふうに、Kさんは日頃から少しずつ整理をしているようである。

ものの価値は、血縁であっても、感じ方が違うものだ。松下はKさんの思いを大切にしていきたいという。

いつも調整役を担ってくれるNさんの通りに来ると、NさんはMさんの戸口で立ち話をして  
いる。配布に気づくと、「寒いのにご苦労様。皆、楽しみにしてるのでよろしくね」と、その列  
の端まで見送ってくれる。松下・森の「手づくり、あそびの会」が、毎月の楽しみとして定着し  
つつあることを再確認した瞬間である。

帰路、バイパスを避けて畑の中の農道を走る。辺りはすっかり夜のとぼりが下りて、名産のレ  
タスであろうか電照栽培のビニール温室の灯が、幻想的な光景を醸し出していた。

仮設住宅を除けば、この風景はこの地区のこの時期のいつもの光景なのであろう。